



は、さっそくに自分も網とかごを持ってきた。

蛭はここ山口市の観光名物の一つになっていて、毎年六月、一の坂川で「蛭まつり」がある。別に何の企画もなく、ただ川沿いを車の通行止めにし、ゆっくり散歩できるようにするだけのものであるが、かなりの人出がある。蛭の数より人間の数の方が多いくらいで子どもづれには向かない。蛭をつかまえたがるからである。この場合はひんしゆくものになる。蛭はなにもそこだけでなく、郊外のあちこちの川にいます。それでも河川改修が進むにつれて、年々減ってくるので、学校をあげて、人工飼育に取り組んでいるところもある。蛭が飛び立つ期間は短いので、私は毎年子どもを誘って、近くの川でちゃんと生きているかどうかを確かめたい。子どもたちもいったんは夢中で捕まえるけれど、年々少なくなる、という大人のつぶやきを聞いているからか、庭に放して、つかの間の所有感を味わうだけである。蛭を手のひらに乗せて、いとおしむように飛び立つのを待つ。

今、私の娘たちは六年生と四年生、日常生活での世話に相当する部分がいぶん少なくなってきた。お金を出すこと、行動予定を確認すること、食事をしながらあれこれ報告を聞くことが主になってきた。あとは、家事の共有、これは食の部分では何とかやれているが、衣の部分はまだまだで、「お母さん、ブラウスにアイロンがかかってない」などと言われ、ブツブツと不平を言いつつしてやっている。そうそう、もう一つ、宿題をなるべくあとにやろうと考えている人がいるので、それを当日にやるようにせかすということをやっている。これが一番いやなことである。いずれ、これからも手を引く予定である。いやもしかしたら反対に、これは大問題に発展するかも知れない。そうならないことを切に祈っている。

というわけで、ただいま、子どもからの撤退をはかっている最中であるが、別の出会いもしていきたい。幸いにして、私にはおやお劇場という場がある。これは今ごろ

になって、特にそのありがたさが増してきたように思う。一つには、親子で共有の文化があるということ。これは幼児時代は、家で本を読んでやったり、世話をしているうちに知らず知らずのうちに体験を共有しているわけで、自分の子どものもの感じ方や考え方に触れていたことになるので、親子で舞台を見に行ってもそれが少し増えるくらいのことだった。しかし、小学生になると、読み聞かせもいつの間にか卒業して、自分で読み始める。私にもすすめられることがあるので、そういう時はのがさないけれど、たいていは子ども一人のこととなる。考えることや体験が複雑になり難しくなるのに、親とは離れていく。そんな時に、いっしょに舞台を見に行くと、その後であれこれおしゃべりするのとはとても楽しい。いつだったか、私が体調をくずしたので父親と三人で「おっちょこちょ医」という風刺劇を見に行くと、「お母さんにも見せたかったー」と楽しそうに報告してくれたときは、くやしかった。高学年用の例会もあって、性の問題や家族の問題も、真摯に取り上げている作

品に出会うと子どもといっしょに同じ問題に向いているという感じになる。都会にいれば、こんなことはいつでもできることだけれど、私の体験から言うと、都会は案外「文化砂漠」みたいなどころがあるように思う。たくさんありすぎて、私はあまりいいものに出会えなかった。

このように受け取る文化も大事だけれど、なによりも創る文化の方が楽しみである。このおやこ劇場も、見るだけでいいという人や、創るなんてめんどろだという人もいる。それにおけいごとや学校の下請けで忙しくて、子どもが大きくなったら離れていくこともある。だけれど、一度でも創ることを体験したらやめられなくなる。

この一月、私たち「くまのプーさん」サークルは「文化まつり」で、劇「おしゃべりなたまごやき」を上演した。大人一三人、子ども二五人計三八人の大所帯で、しかも子どもは赤ちゃんから中一までまんべんなくそろっ

ている。この子どもたちが「劇」をやるなんて、とても成算はなかったのだけれど、とにかくこわいもの知らずで、持ちかけてみた。あれやこれやの相談、打ち合わせを重ねて、練習も始まった。

一月二日(土)午後、初めて、劇に出る人ほぼ全員が集まった。自己紹介を少し改まってした。それが不思議なことに、小さい子ではなく、大きい子がふざけたりはぐらかしたりするのである。それをその親が叱ったり注意すると、かえってむくれてしまうのである。私はそれをを見て、親は自分の子にちゃんとやってもらいたいとあせるのだ、と気づいた。子どもは子どもで、親の前でフォーマルなことはやりにくいのだと思った。私の子どもがいまいち、私の注意をはねかえすのも、わかるような気がした。その意味で、親から離れつつある子どもたちの自我が育っているし、親としてはお互いに補いあうしかないと思った。

全員そろっただけでも、十分感激だったのだが、練習を開始すると、これがまたたいへん。仲間は増えだし、

会場(公民館)は広いので、子どもらの動き回ることを通しげいこをするのだが、とりあえず自分の出番でないところかへ、消えてしまうのである。出番になって呼んでもいないことがざらにある。ほんとに、大きなメダカの群れを相手にしているようだった。とにかく一度通すのに、20分のはずが1時間かかったのである。私とMさんはぐったりしてしまった。あと、練習は来週の土、日しかない。その日曜の午後が本番である。前途多難である。

さて土曜日、今日は衣装も持ってきているので、子どもたちは少し張り切っている。その子たちをつれて、当日の会場(県立児童センター)へ行く。ステージの感覚をつかんでもらうために特別に借りたのだ。持ち時間は三〇分。持っていた衣装をつける暇もなく、立ちげいこをする。思ったより声が響かない。何とか流して、早々にもとの練習場へもどる。舞台のイメージが出てきたので、少し動きがぎめやすくなった。とはいえ、相変わらず、スイスイと動き回る人たちである。王様の散歩

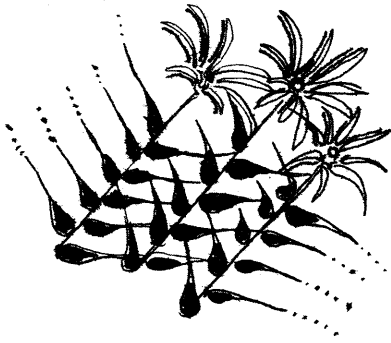
の第二場がいまいちタイミングが合わず、何度か、やり直す。その間出番のない子は、相変わらず遊び回っている。五、六年の男子は鉄砲で遊び、女の子たちは黒板に何か書いたり、思わず幼児ではないかと思ってしまう光景である。そんなものにはもう慣れたけど、今日初めてこのようすを見たお母さんは、「なんとかならんのか」と言ってくる。しかし、この時点では、私には少しいだが一人一人の子どもが見えてきた。まず、Mがこちらに合わせ始めたこと、まかせようと考えたのが通じたみたいだ。始めるよと横を見ると、ちゃんとその場にいる。中学生が色々なアイデアを持ってきはじめてきたこと。たまごの声をどうするか、ピアノでバックに「イエスタデイ」を弾きたいとか、動きについての注文とかが出てきたのだ。弟の代わりにぼくが兵隊をやるとか、ピストルをつかってもいいかなど、単発的に私のところに言ってくる。全体としてのまとまりは感じられないけれど、一人一人とはつながってきたという実感があつた。しかし、舞台の装置も不十分なまま、時間がきて解散した。

さて、いよいよ当日。上演は午後二時頃の予定。朝から公民館に集まる。用意した衣装を出して身につける。一挙に劇の気分が盛り上がる。「ハムレット」の王様に驚き、コックさんの本格的なこと、背の高いぼうしはNさんが夜中の二時まで頑張つて和紙で作りあげたものにわたりのお面をいくつも描いてくれたお父さん、大きな鶏小屋には、ネットもかかつてそれらしくなってきた。王様の散歩の場面で、小道具の草を反対方向に動かそうというグッドアイデアも出て、忙しくなった。そしてうれしいことに、昨日来ないと言っていたあのTu君も来たのだ。「見て、見てーYの顔！」女の子達の声に振り向けば、お医者さんのYくんがつけひげをしている。おたがいの姿を見あつて、ひとしきりさわいだあ、練習に入る。子どもは総出演なので、大人たちは、大道具などにかりだされる。一回通し、ひとやすみしたあと、「これで最後だからねー。もう、何にも言わないよー。自分たちでやってみてごらん」と手を引く。だいたい順序は頭に入ったようだ。セリフを時々間違える

が、意味を間違えなければ少々のことはいいとしてある。音楽に合わせることもいい。時間は約二〇分の中に納まった。さすがに今日は遊び歩く人がいない。幼児が、大きい子の様子を見ようとして、舞台ににじり寄ってくる程度である。あとは照れとのたたかいである。どうしても大きい子の中で、恥ずかしがってしまう子がいる。その恥ずかしさが、声に出してしまうのだ。ラストシーンを確認して終わりにする。たった一つ、最後まで決まらなかったものがある。それは、この劇のハイライトというべき、「たまごの声」である。テープに吹き込

んで早回しをしてみたりしたのだけれど、ピタッと止まらない。とうとう、Tちゃんが声色でやるということだけにした。ぶっつけ本番である。会場へ行く。実は朝から「文化祭り」は始まっていたのだ。余裕のない私達は昼から駆けつけである。二十四のサークルが劇やオペレッタ、合奏などをやる。

ブザーがなって、いよいよ本番開始。ピアノが開幕の音楽を演奏し、スタート、照明室で緊張している私の耳に、次々とセリフがピシッピシッとはいってくる。ナレーターがセリフを間違えたが、コールは動揺しなかつ



た。さあ、問題の「たまごの声」。どうなることかと見守っていたら、まあ、素晴らしい声音で、マイクを上手に使い、会場には誰が言っているのかわからない。タイミングも決まり、思わず会場が感嘆の声につつまれた。そしてそのまま劇は進行し、遠くから見ている私は、「すごい！練習の一〇倍はうまくやった」と、驚いたのであった。照明室の人が「よく練習しましたね！」と、いってくれた。このあと、なんと、「アカデミー賞」受賞というおまけまでついでしまった。

そして四月には「ありんこ市」。子どもたちが手作りのおもちやや、食べ物売り買いをする。今年は何度目の参加である。初めての時は、親たちも子どもたちもおおずおずとしていたが、ブーメランをはじめ、用意したものが飛ぶように売れたことから、すっかり、この企画が気に入ってしまった。翌年、「吹き玉」が「今年のヒット商品」に選ばれたことから、ますます自信を深め、これだけは、自意識過剰さみに意欲的に取り組むのであ

る。子どもたちも成長するにつれ、かわり方がどんどん積極的になってきた。

初めの年、子どもたちは親たちの後ろで、見ているだけであった。むらがつて買いに来るお客に圧倒されていた。そして、もっぱらよそのお店に買いに行くことを楽しんでいった。次の年、子どもたちは、商品づくりを手伝った。当日、正札を書いた。はじめは大人がお客に対応していたがおわる頃になってふと見ると、売り手は子どもたちになっていた。売れゆきが悪いものは「行商」に出ていった。そして三度目、子どもたちは商品のアイデアを持ってきた。商品づくりを分担しはじめた。ポスターも描いた。「つりぼり」が大人気で担当の男の子たちは、お昼ごはんの時間もとれないくらいであったが、ねばり強くお客の相手をしていた。

そして今年。子どもたちは、どんな成長を見せてくれるのか大人たちは楽しみにしていた。

ありんこ市で弓矢と竹鉄砲を売りました。そして弓矢

はすぐ売れ、竹鉄砲は売って歩きました。それに、ありんこ市ははじめての経験だったので、とても楽しかったです。

(四年M)

ほんがあまりうれませんでした。らいねんもまたうります。

(四才H)

一学期に一回ずつやりたい。おこづかいを上げて、品物のねだんも上げたい。売り場を広くしてもらいたい。みんなが買いやすくなるために。

(四年Y)

わたしは、ありんこいちでたのしかったのは、いちごジュースがのこらずうれた。そしてわたしはゆび人ぎょうのかみのけをてつだいました。

(二年K)

かごにクッキーや本を入れて売って回って、大きな声を出したので、のどがいたくなりました。お買物もできたり楽しかった。今度またやりたいなあ。

(四年F)

ゆび人形のしあげ四九コ、徹夜でした。生れて初めての経験でした。あつという間に売れて、カンゲキでした！

(六年N)

クッキーの型ぬきができてとてもたのしかった。また

やりたいです。

(五才I)

多くの子どもたちの中に自分の子もおいて見られること、そして、何よりも共に創り、お互いの成長を確かめあえるのがうれしい。

